［研究ノート］

交流という視点から見る郊外住宅地の居住環境
―― 公開講座報告 ――

The residential environment of the suburban housing estates from the viewpoint of communication
―― The Report of the Open Class ――

千葉　政継，平岡　善浩，本江　正茂，小地沢　将之
Masatsugu CHIBA, Yoshihiro HIRAOKA, Masashige MOTOE and Masayuki KOCHIZAWA

Abstract

In Sendai, about 300 suburban housing estates have developed by private companies after the 2nd World War. New estates are being developed although the population increase in Sendai approaches to zero. On the other hand, old houses are being rebuilt into apartments for single persons. Environments change, and old human relations are lost. In the open class, we examined the factors which secure environments and the relationships between inhabitants in suburban housing estates through the workshop on Teraoka and katsura in Sendai.

１．目的と経過

＊　はじめに

2002年９月21日，22日，事業構想学部・デザイン情報学科・空間デザインコースは，居住環境の保全をテーマとして「交流する地域づくり」と題して公開講座を開催した。公開講座の中で，対象住宅地の個別の課題と同時に，郊外住宅地の普遍的な課題も明らかになった。

以下に公開講座の主旨と経過を整理する。

Key Words： suburban housing estate, residential environment, workshop, symposium
キーワード：郊外住宅地，居住環境，ワークショップ，シンポジウム

＊　公開講座のテーマ設定

環境に目が向けられ始めた1970年以降，住宅においてもスクラップ＆ビルドを繰り返すのではなくストックを増やす必要性が謳われているが，実際には現在も，工事量が減っているとはいえ，郊外では新たな造成が行われ，都心でも古い建物が壊されて，新しいマンションやビルが建てられている。仙台市の人口の伸びは，既に増加から停滞へと変化しつつあるにもかかわらず，である。郊外にしろ都心にしろ，既存住宅地がストックとして住み続けられず，新たな造成が進められるならば，我々は建物だけでなく土地や生活をもスクラップ＆ビルドしていることになる。国の経済の活性を土建業に頼る時代は過ぎ去りつつあるが，それだけでは，この方向は変わらない。不動産管理等の技術的な課題もあろうが，今回は環境の質と居住者の意識を中心に具体的な事例を通して考えることとした。

地球規模の環境の変化だけでなく，生態系の連鎖や，より身近には，社会的な人とのつながり等の直接目に見えない関係も含めた居住環境も，我々の日常の生活スタイルや欲望によって変化している。変化の方向を変えるには，直接目に見えない関係を再評価する必要がある。

こうした考えから「居住環境の保全」を公開講座のテーマとし，一回目として大学周辺の「郊外住宅地の居住環境」を公開講座の対象とした。

＊　公開講座の構成

「郊外住宅地の居住環境」が保全されるには，郊外住宅地に居住環境を意識する人が住み続ける必要がある。居住環境を意識しながら人が住み続けるには，第一に住環境への愛着が必要であろう。愛着を育む条件には，住人の居場所・交流の場所の有無がある。今回の公開講座では，この居場所・交流の場所を手がかりとして郊外住宅地を考えた。

住人の居場所・交流の場所は，年齢や性別によって異なると考えられる。郊外住宅地は人工的に作られた街であり，開発業者は住宅を購入する世代の欲求に合わせて街を作る。その様な街の中で，購入者世代相互の交流の場所，子供や高齢者の居場所・交流の場所はどのように作られているのか，或いは，作られ始めているのだろうか。

以上のような観点に立った上で，環境を実感として捉えるには，実際に居住環境を見て体験として捉えることと，知識として理解することが必要と考え，①中学生，小学生の居場所・交流の場所をテーマにワークショップを行い，②交流全般をテーマとしてシンポジュウムを行う，という二つの柱を設定し，公開講座を行った。

＊　ワークショップ

小・中学生の居場所・交流の場所をテーマにワークショップを行うにあたり，宮城大学周辺の小・中学校に協力を依頼した結果，寺岡小学校 9 名，桂小学校 9 名，寺岡中学校10名の生徒の参加を得た。ワークショップは，3 グループに分けて行い，二名の専門のファシリテーター（船木智子氏：ビーワン，芦立千佳子氏：まちづくり政策フォーラム）と宮城大学の小地沢

が指導を行い，宮城大学の学生14名（4 年生 7 名，3 年生 5 名，1 年生 2 名）と 5 名（田村，千葉，本江，平岡，三枝）の宮城大学教員がサポートした。

ワークショップに先立ち，参加する小・中学校の生徒（ワークショップ参加者以外の生徒を含め）に，居住地域のイメージマップを書いてもらった。イメージマップは，小・中学生の地域への関心を見る為の貴重な資料であり，今回は中学生のワークショップで利用した。

9 月21日(土）のワークショップ当日，参加者は，宮城大学に集合してプレワークを行った。その後，寺岡中学校生は「サッカーゴール」,「カラオケやファッション系のビル」,「奇麗な公衆トイレ」と，自分達の欲しい物を作るに相応しい場所を求めて，3 つのグループに分かれて寺岡の町中で場所探しを行い，桂小学校生は桂の桂島緑地で，寺岡小学校生は寺岡の谷間公園で，それぞれの場所に遊び場を考える，現地でのワークショップを行った。この作業の後，再び宮城大学へ戻り，自分達の考えをまとめて提案を作り，発表を行って，参加者で結果を共有し，ワークショップを終了した。

詳細は後述するが，参加者それぞれが自分達の居住地域を見て，桂と寺岡地域の相互の違いを知ることが出来たと思う。また今後，自分達の提案が何らかの形で実現すれば，地域への愛着も生じると考えられる。

ワークショップを通じて感じられたことは，社会的な刺激を必要とし始める中学生の居場所が，学校でのクラブ活動や学習塾のようにきっちり管理された場所を別とすると，郊外住宅地では，コンビニや公園等，子供に無関心な場所に限られるということである。その点で，寺岡にある関文具店のような個人商店は，子供と対等な関係を結べる貴重な場所と考えられる。

＊　シンポジュウム

ワークショップ翌日のシンポジュウムでは，はじめに主旨説明を行った後，船木氏，芦立氏とワークショップ参加者から結果報告があり，休憩後，宮城大学の大村虔一教授から「こどもの交流・地域の交流」と題し，子供にとっての遊びの重要性と遊べる環境を整える上での地域の大人達の役割の重要性について，氏の子供時代の体験や世田谷区での冒険遊び場作りの経験を事例とした興味深い講演があった。続いて（株)東北設計計画研究所長の塩入健史氏から，御自身のご家族の居住歴や仕事を通しての体験を踏まえた「高齢者と地域の交流」と題する話を頂き，最後に，仙台市泉区役所まちづくり推進課の岩澤克輔氏から泉区内の郊外住宅地域内を毎日のように歩き回っている氏の目を通した郊外住宅地風景論を100枚に及ぶスライドを交えながら話して頂いた。岩澤氏の話は，こちらで用意した「コミュニティセンターを通してみる地域内交流」というテーマに触れながらも，風景に現れる様々な郊外住宅地の生活の様子の相違を明らかにするという興味深いものだった。

続いて，二人のファシリテーターと三人のパネリストによる討議に移った。詳細は記録によるが，討議では，協動から趣味の共有へと移り変わる交流の質の変化や，交流を促す地域作り

の組織や主体の役割，子供時代の地域体験の重要性，障害を持つ高齢者と地域との交わり，元気な高齢者の交流の場としての住宅の役割と交流をバックアップするしくみ作りなどが議論された。

＊　まとめ

シンポジュウムでは，会場とのやりとりのための時間が取れなかったが，ワークショップを含む今回の公開講座において，郊外住宅地の抱える課題や可能性がほぼ確認されたように思われる。

以下に確認された郊外住宅地の課題と可能性を列記する。

課題

・開発30，40年後の居住者の高齢化率の増大
・自動車頼みの生活
・中学生，高校生の居場所の欠如
・世代を超えた交流－伝統の再構築，（遊びの環境作りの整備）
・地域間交流
・郊外住宅地アイテムの再検討（購入者の欲望から，高齢者や子供を含めた環境作りへ）

可能性

・コミュニティセンターをめぐる町内会活動の活性化
・交流の場所としての個人商店，住宅
・古いしがらみがなく，様々な活動をサポートする組織が作りやすい
・様々な施設による交流場所の拡大

今後は，上記の課題，可能性を念頭において研究を深めて行きたい。

２．シンポジウムの記録

日　　時：2002年９月22日　13：30 － 17：00
場　　所：宮城県立図書館 2F 養賢堂ホール

＊主旨説明

千葉：今回宮城大学の事業構想学部・デザイン情報学科・空間コース主催で初めて公開講座を行うに当たり，「交流する地域づくり」というテーマをとりあげました。その説明から始めさせて頂きます。よく二十一世紀は環境の時代だと言われます。何故かと考えますと，人間や生物をとりまく状況が，かなりまずい方に向かいつつある。例えば，従来であればまったく関係ないと考えられていた我々の生活と地球温暖化が関係をもちはじめている。二酸化炭素をどんどん排出すると，氷河が溶けて，それが我々の実際の生活に影響を及ぼす。生態系に対する影響もあります。農作物を育てるのに，化学肥料，農薬を使うと，魚

の体内に蓄積されて，我々の体に入る。そういう，従来は見えない部分であった「間のプロセス」が，非常に重要だということがわかってきた。見えない仕組みを見ないといけない時代になってきている。私どもが大学で教育・研究している生活環境の分野でも，例えば，阪神大震災や様々な事件が起こると，人々の交流や，コミュニティ等，見えないものの重要性というものが非常に注目されています。そういう考えから，私達の研究・教育の対象である居住環境の保全を考えるに当たり，「交流」を一つのテーマにしようと考え，今回は第一回目として，宮城大学のある，郊外住宅地を対象にしたわけです。

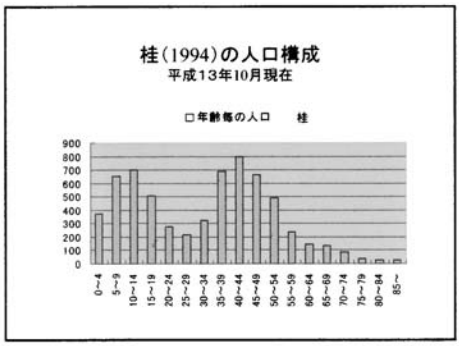
郊外住宅地であれ，どこであれ，居住環境を保全し，良くしていくためには，住人のその地域に対する愛着が必要になると思います。どうすれば愛着が持てるかという考えから環境を捉える時，頭の中で考えただけでは実感としては捉えにくい。従って，実際に町を見て歩いて，身体で体験したり，人の話を直に聞いたりする事が非常に重要だと考えました。そこで，今回の公開講座では，本日のシンポジウムに先立ち，昨日ワークショップを行いました。ワークショップには，寺岡小学校，寺岡中学校，桂小学校の生徒さんに参加して頂きまして，会場の皆さんに代わり，彼らに実際に町を見てもらいました。その報告は後程行います。

この主旨説明では，知識として一般に言われている郊外住宅の課題について触れたいと思います。大きく括ると二つの課題があります。

一つは，住んでいる所と，仕事場，遊ぶ場所，買い物をする所が分離しているという事があります。一般に人の生活には，住と食，遊，祈り，学びという，五つの要素があると言われますが，この要素の分離が郊外住宅地の一つの課題として挙げられます。特に職場，買い物をする場所，遊ぶ場所を，車という手段を利用して，自分たちの住んでいる所の外に求める。車の弊害というのは，排気ガスを出すという事だけではなく，生活地域にたいする関心を弱める事にもあります。ですから，自分達の住んでいる地域を歩きまわってみる事が必要ではないかと思います。

二つめの課題として，居住者の入居時の年齢が大体同じですから，一斉に高齢化していくことがあります。実際はどうでしょうか。これは桂の人口構成です（Fig1）。二つの山があります。大人の山は，40才～44才がピークになっています。桂の分譲は，始まってから今年で十年くらいになります。ですから子育てを始めようという30才～35才位の人が郊外住宅地を買っている状

Fig1



況が分かります。もう一つの山が，子供の山です。桂の場合は10才～14才。十年経っていますので，子ども達が０才～４才くらいの時に購入して住み始めている。これは寺岡（Fig2）ですが，桂より10年前に出来ています。このグラフを見ますと，今，寺岡の大人のピークは50才～54才ですから，桂とちょうど10年ずれている。

Fig2

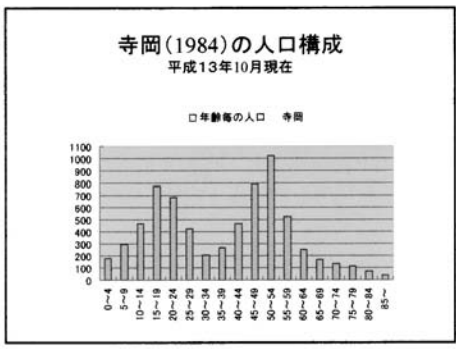


Fig3

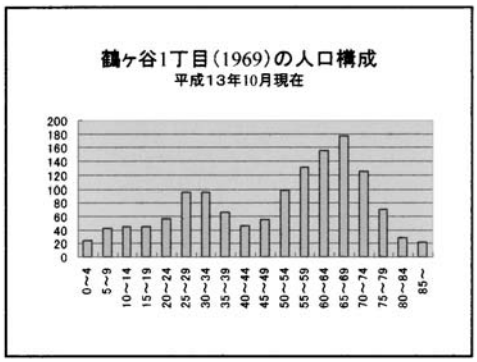
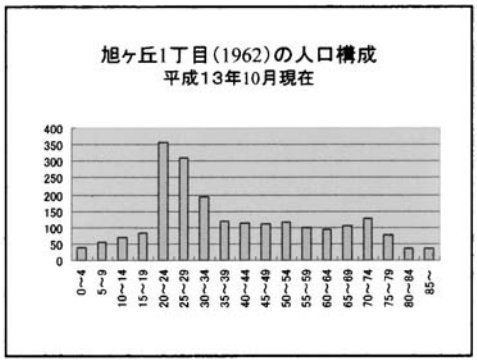


Fig4



これは鶴ヶ谷（Fig3）ですが，寺岡よりさらに15年前に分譲された住宅地です。ピークが，65才～69才，70才くらいになっています。鶴ヶ谷の場合は，65才以上の高齢化率が，すでに30％を超えています。これは旭ヶ丘（Fig4）ですが，鶴ヶ谷よりさらに前に開発された住宅地です。70才～74才が，かすかに大人のピークになっています。ここでも同じようにピークがずれています。この場合，子供の山がなく，20才～24才が山になっています。これは何かといいますと，地下鉄南北線が開通して便利になり，ワンルームマンション等の単身者用アパートがたくさん出来て若い人達が増えている。こうした人口構成の推移が郊外住宅地の二つ目の課題と言われています。

次に，郊外住宅地の起源について簡単に触れたいと思います。19世紀の末から20世紀の始めにかけて，田園都市という事が言われまして，イギリスのハワードが20世紀の初めに一つの形を提案しました。田園都市というのは，20世紀の発明品でした。それまでは田舎と都市しかなかったのですが，18世紀末から19世紀初めの産業革命で都市への人口流入が始まり，都市の生活環境が非常に悪化した。それで，都市の人口を分散化し，生

活環境を改善する必要もあり，考えられたのが田園都市です。田園都市は都市と農村のそれぞれの長所を併せ持つ自立性のある居住環境として考えられました。例えば，農村の新鮮な空気と緑，都市の社交の機会，仕事の機会，報酬，それぞれの長所をあわせ持つ都市として考えられたのです。20世紀の間中，田園都市が世界各地に作られましたが，結局は失敗したといわれています。どういう状況になったかというと，都市の郊外になり，際限のない都市のスプロールを招いた。職場は都市にあって，郊外はベットタウン化した。

一方で，アメリカでは，ベットタウン化した郊外住宅地開発を積極的に進めていった。ハイウェイを整備して，都市の職場に通う人を緑豊かな田舎に住まわせようとした。これがアメリカの約50年ほど前に始まる郊外住宅地開発の経緯です。

日本でもアメリカの後を追って15年ほど遅れて郊外住宅地開発がどんどん始まっていった。アメリカでは1980年ころになると，郊外住宅地やハイウェイが増えて田舎の畑や緑がどんどんつぶされる中で，大気が汚染され，温暖化や水の不足等の問題が出始め，これを反省する動きが出ました。そこで言われたのは，自動車利用の削減，歩き回れる範囲で生活出来る町，コミュニティのアイデンティティ，自然との共生といったことです。これは現在の日本にもあてはまると思われます。

結局，先ほど申し上げた郊外住宅地の課題に対する解答は，地域への愛着であり，互いの交流を計り，住宅地域内のアイデンティティを作りだすことにあると思います。

* ワークショップ（小学生）：船木智子氏（ビーワン　ディレクター）

船木：私は，普段子ども達と，絵を描いたり，ものを作ったり，料理を作ったりするような，表現活動を一緒にすることを仕事としています。定禅寺通りを子ども達と歩きながら「どういうふうにしていくともっと良いのかな」という町歩きをしたり，町巡りをするような事もしています。常々そういう子ども達との活動の中で，思い，感じている事は，子どものうちから自分の住んでいる地域で活動して，自分の町に親しみをもち，誇りを持つ事が大事ではないかということです。子どもだからって自分の町に責任をもたないという事ではなくて，小さい時から「もっとこうすると楽しい町になるんじゃないか」という視点を持つ事はとても大事ではないかと考えています。今回は，桂と寺岡の子と一緒に「自分の住んでいる地域をこうしたらもっと楽しくなるんでない？」という視点をもてるようなきっかけづくりのワークショップを考えました。

ワークショップでは，子ども達がどんなところで何をして遊んでいるかを，一人 5 個，地図におとしてもらいました。桂や寺岡の子ども達がどんな所で，どんな事をしているのかという，現状把握をする意味もあるし，子どもにとっては，地域の中で，普段遊んでいる所を考える事で「こんな所もあったんだ」という気付きになるし，「遊ぶのっておもしろいよね」と，自分の町を振り返る事ができると思い，まずこれをしました。

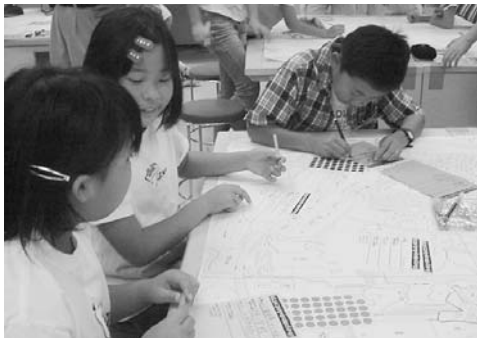
桂の子ども達のグループは大体 4，5 人だったので，一つの地図に20〜25の遊び場が出てきました。どんな視点で 5 つ子ども達に選んでもらったかというと，対象地域の中で好きな場所，他の人はちょっと知らないだろうという場所，それから是非他の地区の人達に知らせたいと思う遊び場ということで五つ選んでもらいました。

桂地区の子ども達は，好きな場所では，桂中央公園，四丁目公園が良いと言っていました。遊具が充実しているからだそうです。寺岡の子が「是非その遊具で遊んでみたい」と言ってましたが，「遊具で遊ぶのが中心なのかなあ」と感じました。他の人はきっと知らないだろうという場所として，中央公園の「トトロのトンネル」と称する場所を教えてくれました。これくらいの茂みですが，その中を渡り歩いて遊ぶそうです。「四丁目の東北自動車道の脇の小道を通っていくと田んぼがあって，そこで虫取りをしているんだ」，「チャリンコでよく行くんだ」と言った子もいました。作られた場所だけではなく，隙間で遊んだり，遠出して自分なりに遊びを展開していると感じました。

続いて寺岡地区ですが，人気の場所というと，寺岡小学校裏の寺山です。とんがりコーンと呼んでいる給水塔のある寺山です。とっても良い雑木林で，様々な遊びが展開できると思いました。家からロープとかビニールを持って来て隠れ家作りをしたり，秘密基地を作っている子もいるし，きのこ取りとか，ツチノコ探しをしているというのもありました。紫山の中央公園も人気の場所でした。「何で良いの？」と聞いたら，「広い草はらがあるから」という意見がありました。きっと皆は知らないだろうという場所に，木戸川というのがありました。木戸君の家の近く流れる川だから木戸川だそうです。木戸川で魚釣りをするという子ども達もいました。子ども達は子ども達の世界で，様々な所を見つけて遊ぶと感じました。

今回，子ども達がこういう遊び場で遊んでいるというのがわかりましたが，もう一つ，「こうしたらきっと良い所になるんじゃないかな」というアイデアを出してもらいたいと

地図に遊び場をプロット



発表してみんなに紹介

考え，遊び場の地図作りをした後，まちへ出かけて，ワークショップをしました。

桂地区は，桂島緑地帯の道路に面した所に，東屋があって草ぼうぼうの所があります。その遊水池周辺を目指して子ども達と出かけました。

寺岡地区では，谷間公園と呼ばれている遊水池です。ここも作られた当初は東屋やベンチが整備されていたようですが，子供たちの話では「便所が汚い」とか，「あそこは行かない方がいい」とか，今は荒れ果てています。そこをターゲットにして，子ども達と考えてみました。この二つの場所を選んだ理由は，作られた時は格好を整えて作られたけれど，結局，住民の方達に使われていないと思われたからですが，子ども達が，この二つの場所で，歩いたり，かくれんぼ遊びをしたりして，「自分達だったら，こんな遊びができる」，「ここをこう変えたら，楽しい場所になって人もやってくるのでは？」というアイデアを考えました。それを子ども達に発表してもらいたいと思います。

初めに桂の桂島緑地の遊水池近くの東屋がある場所です。名前のついていない所のようですが，そこでどんな遊びができるか，ここをこう変えたら良い場所になるし，人も来るというアイデアを言ってもらいたいと思います。

井上賢一：桂小学校の井上賢一です。桂に住んで八年ですが，昨日始めて桂島緑地の東屋があるあたりに行きました。東屋の中にはゴミがたくさんあり，草ボウボウでクモの巣だらけであまり感じのいい所ではありませんでした。この東屋のまわりをどうしたらもっと楽しい所になるか，みんなで考えたので聞いてください。

僕の意見は，桂島の下の堤に，向こう側に渡れる船をとりつけて欲しいことです。船をとりつけたら，向こう側を探検できるし，船ということで橋とは違う楽しみがあります。是非船をとりつけて下さい。

船木：こっちからこっちへ渡る舟があったら楽しいと彼は考えたらしいです。

相澤卓：僕は相澤卓です。桂に住んで五年になります。僕は桂島緑地で遊んだ事がありますが，今回のようなワークショップで見るのは始めてでした。昨日見たらゴミがたくさん落ちていて草ボウボウでした。だから草を刈った方がいいと思います。そうすると遊び場ができていいと思うんです。あと，桂島緑地に三本の柳の木があるんです。そこにハンモックをかければ寝れると思います。

船木：ここに柳の木が三本，風が吹いて気持ちいいんだよね。

近藤里美：私は，桂小学校四年の近藤里美です。私は萩山をみつけました。萩山の中には六人くらい入れて，二つ入口がありました。隠れ家にもなるし，秘密基地になるのもいいと思いました。もっと大勢で入れるように，中にゴミを捨てないでほしいと思います。

船木：萩山という名前をつけたんですね。萩のこんもりしたところがあって，かきわけていくと，人が入れる，皆で入ってみたんです。

阿部れいな：私は桂小学校四年一組の阿部れいなです。私は紫陽花が植えてある所を見つけました。雑草やゴミをとったりすれば迷路になると思いました。何故迷路にしたいかと言うと，遊び場所があまりなくて，少しでも遊べる場所があればいいと思ったからです。六月頃になれば紫陽花の花が咲いて，綺麗な迷路になると思いました。皆が入れる楽しい迷路が一つでもあればいいと思いました。

船木：紫陽花が咲いてる時を見たことはないですが，きっといい迷路になるね。

水野俊：僕の名前は水野俊です。桂で六年間も住んでいます。ぼくは栗の木を見つけました。栗がいっぱいなっていて，毎年栗狩りができて楽しいです。

斎藤万莉：私は桂小学校六年の斎藤万莉です。この辺りは雑草ばかり生えていて汚い場所でした。高い草ばかりなのであたりが見えません。私は草が生えているところを全部芝にすればいいと考えました。ただ芝にするだけでなく，飼っている動物を連れてきたりして遊べるようにすればもっときれいになるし，にぎやかになると思いました。水が少し流れている小さな川がありましたが，その向こう側で遊びたいと思った時，石を飛び越えていかなければなりません。それでは渡りにくいので，橋をかければ渡りやすくなるし，危なくなくていいと思いました。

鈴木絵理：私は桂小学校四年の鈴木絵理です。桂島緑地はブランコなどの遊具がなくて，とても寂しい所です。だから，池のそばにある木の上に秘密基地を作れば，子供達もいっぱい集まってにぎやかになると思いました。ベンチがあるのに雑草が生えてて座りたいと思わないので，ここを綺麗にして季節によってコスモスなどの花をいっぱい植えたらいいと思いました。

船木：寺岡チームお願いします。

照井浩平：僕の名前は照井浩平です。ここは寺岡では存在のとても薄いところで，雑草がかなり生えていて歩くのが大変でした。僕は坂があるのを見つけました。坂にススキなどを

桂島緑地　萩山でかくれんぼ

桂島緑地　栗採り

敷いて，水をかけてソリのように滑れそうだと気付きました。ここでは木登りができそうな松を見つけました。かなり眺めがよさそうでした。直してほしいところは，「危険」の看板が消えかけていたり，雑草が異常に生えていて，入口が見えないので大変でした。

佐藤匠：僕は，六年生の佐藤匠です。草を迷路のように刈れば，ススキの迷路ができると考えました。谷間公園のゴミは拾った方がいいと思います。入口を見えるようにした方がいいと思います。看板の「危険」を新しくすればいいと思います。

柏崎祐樹：僕は六年二組の柏崎祐樹です。僕が谷間公園を探検して思ったのは，草ぼうぼうだったことです。それに犬に糞をさせないでほしい事です。僕は谷間公園に遊具をつけた方が小さい子供達が遊べると思います。公衆トイレがありますが，悪い事件が起きそうで怖いので，トイレをなくして安心して遊べる公園にした方がいいと思いました。

山口心路：ぼくは六年の山口心路です。僕は谷間公園の東屋の近くにトンネルを発見しました。その中に入ったら中に栗の木がありました。下には栗の実がたくさんあって，好きなだけ拾えました。

柏崎祐樹：今，地球温暖化が進んで，ゴミのポイ捨てなんかも多いんですけど，それは本当になくした方がいいと思います。

船木：今日は来れなかったのですが，女の子達の意見もなかなかよかったので，宮城大学四年生の吉川裕子さんに代弁してもらいます。

吉川：女の子達はこの谷間公園に人が集まるように幾つかアイデアを出してくれました。一つ目は，道をキレイに作ってその脇に花を植えることで人がたくさん集まるだろうというアイデアです。二つ目は，坂の傾斜がすごく急なので，お年寄りが来られないので，坂をなくせばいいのでは，というアイデアが出ました。三つ目が，現在の東屋の対岸にもう一つ東屋を作って，谷間を横切って，その間を橋で結ぶことで，多くの人達が来てくれるんじゃないかというアイデアを出してくれました。以上です。

谷間公園　すすき

谷間公園　栗の木登り

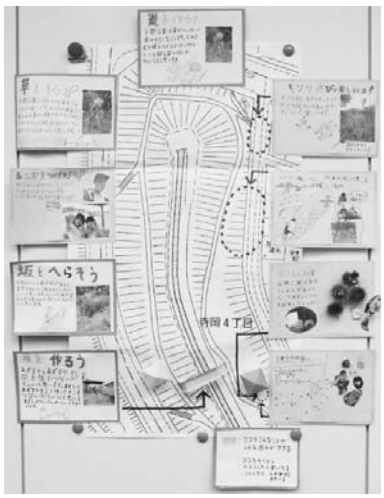
船木：寺岡チームのみなさん，ありがとうございました。昨日歩きながら井上賢一君が，「僕達は子供だから，いろいろアイデアは出せるし，してほしいという言い方はできるけど，実現はできないんだろうな」と言ってたんですが，「大人の人に今日話してみたら，一緒にやりたいって人も出てくるかもしれないし，皆の意見を聞きたいな，と言ってくれるかもしれないから」と言ったら，今日はこんなに集まってくれました。「このワークショップ，お母さんに行くように言われたの？先生に行けって言われたの？」と，子ども達に聞いてみました。そしたら「行ってみたらって言われたけど，自分でなんか楽しそうだったから来てみた」という子がほとんどでした。桂の子も寺岡の子も，こういうアイデアを出すこともできるし，やる気もあるし，動きもとっても軽い子達です。ですから，小さい時から大人と一緒に，身体使って一生懸命やって，桂も寺岡も皆で，大人の方も皆一緒になっていい町にして頂いきたいと，外部の人間ですが，私は思います。できるなら私もお手伝いさせて頂きたいと思います。

* ワークショップ（中学生）：芦立千佳子氏（NPO 法人まちづくり政策フォーラム）

芦立：まちづくり政策フォーラムの芦立と申します。まちづくり政策フォーラムという会社

あそびのアイデア　桂島緑地

あそびのアイデア　谷間公園



は，地域作りに関する様々な仕事をしておりますが，私は主に住民参加のワークショップのファシリテーターを担当しています。今回のワークショップは，中学生が地域に関わるとはどういう事なのかを考えるきっかけ作りになればいい，という宮城大学側の考えでしたので，それを踏まえてワークショップを引き受けました。

私がどのような事をしたかと申しますと，中学生になってしまうと「遊び場」というよ

うな言い方だと「ピンとこないだろうなあ」と思い，子供達の居場所はあるのかなという事を考えながらワークショップを作りました。その流れに沿って報告します。

昨日参加したのは，寺岡中学校の三年生，男子 8 名，女子 2 名，合計10名です。宮城大学の四年生の男子が 3 人，三年生の女子が 3 人，計 6 人の学生に手伝ってもらってワークショップを行いました。ワークショップにあたり，事前にイメージマップを作ってもらいました。これがその結果を纏めたマップですが，斎藤君から報告していただきます。

斎藤：私は宮城大学四年の斎藤です。これは事前に行ったイメージマップの結果をまとめたものですが，赤い色で示しているのが「知っているお店」，青色は「遊び場所」，黄色で囲ってあるのが「好きな場所」，緑色が「嫌いな場所」です。

嫌いな場所として一番多かったのが中学校だったんですが，それ以外にマッピングをして気になったところは，こちらに文房具屋さんがあるのですが，場所的には中学校からそれほど近くないにも関わらず，非常に人気がある場所で，15人中10人が書いてるんです。昨日ワークショップに参加した中学生にその理由を聞いたところ，ここはお気に入りで，駄菓子があったり，店のお姉さんがとても感じよく，人気が高いということでした。

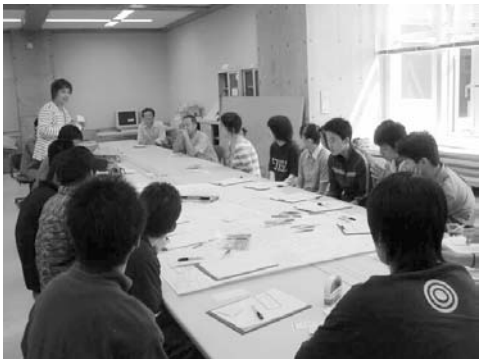
こちらは普通の道路の部分を好きな場所として囲っていた人がいたのですけが，その理由を中学生に直接聞いたところ，道路を柵で区切ってあり，車が通り抜けられないので，道路で遊ぶことができるので，好きな場所なのだそうです。

芦立：このアンケートには，ワークショップをした中学生とは違う中学生が答えているんです。昨日来た子たちに，さっきのお店を「皆は好きなの？」と聞くと，やっぱり「好きだよ」とか「あそこ，おもしろいお店なんだよ」という答えがあったり，「ほかの学年の子達がここらへんが好きって答えたんだけど，君達はどうなの？」というと「あ，あそこね，あそこはきっと行き止まりだから遊べるんだよ」なんてことで，子供達が，割と共通の認識で町を知っているようで，町に対して関心があるのかなと感じました。子供達はいろいろ出歩いて遊んでいる。特にお店は皆共通に知っていて，公園で遊ぶよりお店で遊ぶほうが多いのかなと，面白く見させて頂きました。

次に自己紹介カードを作ることにしました。その時に，名前と，寺岡に住んで何年です，という事を書いて頂き，この寺岡に何があったらいいか，何ができたらいいかを書いてもらいました。寺岡中学校の三年生の子達は大体生まれてからずっといるという子達が多いし，その反面「中学校から転校してきました」という子達もいました。何があったらいいかを述べてもらった所，大学生は，吉牛が欲しいとか，癒しの場が欲しいとか言っていたんですが，中学生達は，「きれいなトイレがほしい」とか「サッカーゴールがほしい」という子達と「カラオケやファッション系のショッピングビルがほしい」という子達の 3 つに分かれました。彼らは彼らの希望の違いに応じて，ジャージ系と，おしゃれ系と，可

愛い女の子達の，丁度，三つの層に分かれました。その後，私達はすぐに町歩きをしました。町歩きは 3 つのグループに分かれて，大学生が 6 名なので，子供達に大学生二人のペアがついて歩くことに決めてましたので，「サッカーゴールがほしい」中学生 4 人，「きれいなトイレがほしい」中学生 3 人，「カラオケやショッピングビル，おしゃれなビルがほしい」中学生 3 人の 3 つのグループに分かれて歩きました。

マッピング作業



まちあるき

各グループの町歩きの様子やワークショップの結果を，一緒に歩いた学生達にそれぞれ報告をしてもらいます。最初に「サッカーゴールが欲しい」といったグループです。

大坂：宮城大学三年の大坂美香と申します。私は「サッカーゴールが欲しい」と言った子達と「サッカーゴールがあったらいいな」という場所を探して歩きました。寺岡中学校を出発して，ロイヤルパークホテルの方に歩いていくと，結構大きな空地があって，そこが良いという事になりました。全然整備されてなくて，草が30～40cm くらいあったのですが，「ここでやれるのだったらやりたい」という話だったんです。実際には全然できる状態じゃなくて，「いつもサッカーをどこでやるの？」って聞いたら，「寺中は部活で使ってできない，寺小でやってたけれど，入っちゃだめと言われたからできなくなった」ということです。「サッカーする場所がなくなった」と言って残念がっていました。それで，ここが候補地になったんですが，他にこちら側にも土地があったんです。子供達に「何でこっちがいいの？」と聞いたら，「形が変」とか，「やれないじゃん」，「他には無い」ということで，ここだけが候補地でした。となるともうあとは行く場所がなくなったのですが，目的を変えて，幽霊スポット探しという事になりました。で，少し戻って，大きな沼があるんですが，ここに幽霊がでると教えてくれました。それから野球場の横を通って，今度は幽霊が出る電話ボックスというのがあって，1111を押すと電話がかかってくるらしいんです。かけてみればよかったのですが，かけませんでした。すぐ近くの公衆トイレは幽

霊が出るトイレだそうですが，こちらにも入りませんでした。次に，寺山に向かってずっと登ってきたんです。中学生達は，「外灯がなくて夜は絶対入りたくない」と，まだ明るいのに怖がってました。ここに散策路があるんですが，散策路も草がボウボウで，散策路って言われても全然見えませんでした。「心霊写真になっているといいね」と言って，一応は写真に撮ったんですが，残念ながら映ってませんでした。この辺に虫や鳩がいっぱい死んでたんです。お化けより虫の方が怖いみたいで，逃げ回ってました。とんぼが目の前に来たら逃げてました。ずっと寺山を登って行きましたが，「とんがりタワーもつまらない」と言って，山の中の道を下ってきたんです。二手に分かれて，「どっちが早いか」と競争したんですが，すごいもので，中学生は何処にでるか，大体山道が分かるんです。それで下に降りて合流して，昼食を三丁目公園で食べて，それからファミリーマートで飛び入りの少年，ミスター伊賀君に出会い，無理やり引っ張って寺中に戻ってきました。これで，サッカー少年の旅は終わりです。

芦立：このグループは，ちょっと冷めた子達だったので，なかなか大変だったんです。次はトイレグループの荻野さん，お願いします。

荻野：宮城大学三年の荻野と言います。私は，「新しいトイレがほしい」という子達 3 人と，寺岡中の周りを歩いてきました。新しいトイレを作る場所を探そうということで，寺岡中から出発してグルリとまわったのですが，まず，いつも使っているトイレを調べてみる事になり，子供達に連れられて，いろんなトイレを見てきました。いろいろまわっているうちに，中学校の近くに 8 つもトイレがあるのが分かりました。店の中のトイレだったり，公園のトイレだったりするんですが，一つ一つ調査してみて，公園のトイレがやっぱり汚くて，あかずのトイレがあったり，流れていないトイレがあったりでした。それで初めに，新しいトイレが欲しいって言ってたのですが，調べてみると，既にたくさんある。トイレの数が多いのに，中学生達が新しいトイレを欲しがっているのは何故なのか，と考えました。まず公園のトイレが汚くて，実際は使用していないという実状がありました。そこで中学生達と，「お勧めトイレ」と「できれば使用したくないトイレ」に分けてランク付けをしたんです。一番人気は藤崎スーパーマーケットの店舗内のトイレでした。これは 3 人ともに好評で，匂いもいいし綺麗だったんです。一番人気がなかったのが谷間公園のトイレで，入口にクモの巣がはっていたり，男女兼用だったり，流れていなかったりするんですが，すごい状況で，最初からここだけは使いたくないと言っていた場所でした。

店の人などが定期的に掃除している場所は人気があったんですが，公園のように，いつ誰が掃除しているのか，紙を誰が補充しているのかわからないトイレは人気がなくて，そういう場所をこれから誰が管理するのかが課題になりました。新しいトイレを作っても，この公園のトイレのように汚くなって使われなくなるならば，新しいトイレを作るより，

今あるトイレをどう綺麗に使用していくのかが問題ということになり，私達のグループワークは終わりました。

芦立：トイレのグループはすごく問題意識がはっきりしていたので，地図を作るのも早かったし，その後の話し合いも，まとめまでサッサと進んだグループでした。

寺岡山の「基地」

トイレ調査中

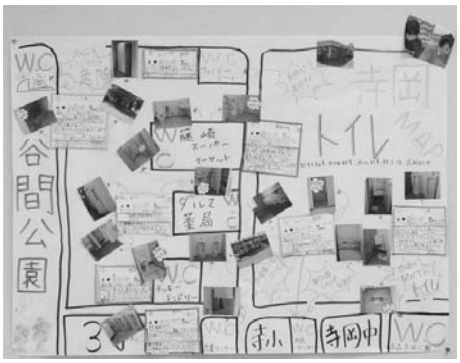
最後に，「カラオケやファッション系のショッピングビルが欲しいチーム」。

早坂：宮城大学三年の早坂ちかと申します。私達のグループは「カラオケやファッション系のショッピングビル」を掲げたチームです。ショッピングビルを何処に作ったらいいのかを考えながら歩きました。最初は中学校から出て，大きい通りを歩こうということになって，まず，西に向かって歩いていきました。最初に見つけたポイントが児童センターというところで，ここで中学生達は野球や，サッカー等をして遊んでいるという事でした。次に行った場所が関文具店，通称「関文」でした。私達のグループは男の子 3 人ですが，皆このお店のお姉さんとすごく仲が良くて，兄弟のような感じで話していました。ここもホットなスポットでした。次にもう少し歩いて行くと，バーバー寺岡という理容院があるのですが，彼らは，名前がおもしろいとか，店長さん，店員さんがおもしろいって事で，自分達だけのお気に入りのスポットとして挙げていました。少し先に進むと谷間公園があります。最初，公園だとわからずに歩いてたんです。階段を見つけて下に降りると，公園らしい柵があって，外灯もしっかりあったんですが，草がボウボウで立ち入りできない状況になっていました。春は桜がきれいだけど，それ以外の季節は近づきたくないという所でした。北に移動して，大通りにぶつかったんですが，谷間公園の隅に公衆トイレがありました。クモの巣が入口をふさいで，中もかなりひどく，写真を撮れる状態ではありませんでした。ある種，自然に触れ合える場所なんだと感じましたが，寄りたくない場所でし

た。次に紫山との間の道路を東に歩いて行きました。気付いたことは，住宅密集地なんですが，個人商店や食べ物屋が多い事です。更に歩いていくとファミリーマートがあって，ここで昼食を買いました。ここも中学生の溜まり場という事でした。お昼を食べる場所を探して南の方へ戻って，三丁目公園に行きました。他のグループもそこで昼食をとっていたので，そこで食べました。午後は，ショッピングビルの候補地がまだ見つからないので，東の方に探しに行きました。するとハウジングプラザの敷地が，どんとあって，「ハウジングプラザをつぶして，そこにデパートやゲームセンターを置いたらいいんじゃないか」ということになりました。向かいにロイヤルパークホテルがあるんですが，その手前にも空き地があって，「あそこは何にするの？」と聞いたところ，「デパートとかを建てるのではなく，そのままにして，外で遊べるような空間にしたらいいんじゃないか」という事になりました。「隅のほうにはカラオケボックスを置こう」という事になりましたが，周辺に民家があるので，「自分がそういう所に住んだら絶対迷惑と感じるから，そういうところに住みたくないでしょ」って言ったら，「防音をしっかりと整えたカラオケボックスだったらいいんじゃないか」という意見がでて，場所探しを終了しました。

まとめ作業

トイレ調査結果



芦立：宮城大学へ戻ってから，この地図をそれぞれのグループの中学生達が書きました。大変でしたが，大学生の皆さんの指導でここまでになりました。3 グループが地図を書き終わった時点で，どうしたらいいのかを全員で話し合いました。出歩いた時に，こういうカードを持って歩いたんです。「お昼を食べた場所」は，おにぎりマーク，「一番お気に入りの場所」は，ハート，「大好きな場所」は，ニコニコマーク，「嫌な場所」は，泣きべそマーク，「ここにこんなのがあったらいいなあ」というのは，ビックリマークにしようと決めて，各自書いてきたんですが，その中の「嫌だなマーク」だけをここに貼りました。その中で皆がそれぞれ一番嫌だと思う場所を一ヵ所選んで，選んだ理由やそれがどうなった

らいいのかをカードに書いてもらって貼りあげたのがこれです。「嫌だな」と思う場所では，谷間公園，とんがりタワー，あと近隣公園の沼です。草がたくさんあって，草刈りをしてほしいと思われる場所が挙げられました。それからトイレです。谷間公園のトイレです。とにかく汚かったのが印象に強かったようです。それから公共施設です。最初のアンケートで，テニスコートが嫌いと塗ってる子達が多かったんです。何故かと思ってたんですが，ここで答えが出ました。仕方がないんですが，いちいち許可をとらなければ，空いていても使えない。使う時に使用料がかかるからなんです。野球場が中学校の脇の公園にあるんですが，使われてなかったんです。「こんなにいいところがあるのに使わないの？」と言ったら，「そこ使うと怒られるから」と言われて終わったんです。結構立派な施設があって，空いてるんだけれども，手続きの問題で使えないということで，3 つのグループそれぞれに，嫌いな場所，気になる場所というのが挙げられました。

本当はもう少しつっこんで話ができればよかったんですが，ここら辺が私どもの体力の限界で，そこまでで終了したんです。草刈りもしないといけないし，公共施設も使い勝手よくしたほうがいい，トイレも綺麗にしなくちゃいけない，というのが出たんですが，「それを誰が管理するの？」というとこまでは出てこなかった。実は，「役所がしたらいいんじゃないのかなあ」と，あと優等生的なところでは，「地域のボランティアや学校の総合の時間を使って少しずつ綺麗にしていったほうがいいと思う」というのもありましたが，最後には「専門の人に頼んだ方がいいぞ」というようなところが，いまどきの中学生の解決方法のように思いました。というところが，昨日のワークショップでした。

なんとなく「今の施設や設備，場所をうまく活用すればそれなりに暮らしやすくなるんじゃないかな」というのは子供達もわかっているようです。ただ，「その維持管理って大事なんだよね」，「施設があるだけでなくて，綺麗にしなくてはいけないんだよね」ということに話をもってくることは出来たのですが，「それを誰に任せるの」というと，「しーん」という状態です。今時の子ですし，逆に「僕達でやろう」と言えば，それはそれなりに気味が悪い話なのかなというところでした。ただ，総合学習で，昨日中学校の先生も見に来てくれたんですが，「自分達が地域でどのような関わりができるんだろう」ということを考えて勉強してらっしゃるそうなんです。それで今後の課題のテーマになるのではないかという事で参加した子達もいて，「総合学習の中で掃除したらいいんじゃないか」というようなカードを書いてくれました。

虫が嫌いで，とんぼが飛んできたら逃げるような男の子達がいたり，お店が遊び場であったり，泉中央まで出かけて買い物して帰って来るのが普通の遊びであったり，大丈夫かなと思ったんですが，一方で，山の中の秘密の道とか，「ここから出ると寺小に出て，こっちから出ると寺中に出て，あっちから出ると何丁目の何さんの庭に出るんだ」というこ

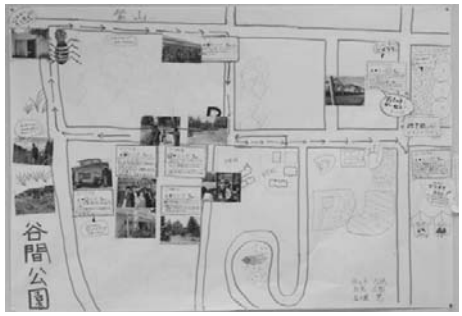
とを知ってる腕白ぶりもありました。また，「昼はみんな外で食べよう」ということにしたんですが，結局 3 グループ全員，食べた場所が同じで，児童公園に集まったんです。「どうして」と聞いたら，そこは必ず通る道なので，溜まり場になってるそうで，ワークショップに参加していない他の子達も「何してるの？」と寄ってきて，それなりに子供たちの居場所はあるのかなあと思いました。また，閑静な住宅街の中で幽霊スポットを探すような，そんな刺激を探し求める今時の中学生の姿が見えました。

今回のワークショップでは，カードに記入して，声に出して発表するという手法を使わせて頂きました。多数決とか，手を挙げて返事をして答えるのが当たり前の子供たちには新鮮だったようで，長時間の拘束だったんですが，最後には「意外に楽しかった」という感想ももらえて，ホッとしました。

今回の公開講座の目的が，交流する地域作りのきっかけ作りということでしたので，他人任せではなくて「ここの管理は誰がするの」と，自分のこととして考えられるようなきっかけや投げかけを，今後宮城大学でして頂けたらいいのかなと思いました。

サッカー少年のまち探検

ファッションビルが欲しい



＊ こどもの交流・地域の交流：大村虔一（宮城大学教授）

地域の持続性・サスティナビリティ

20世紀に開発した町が社会的なストックになっておらず，都市のサスティナビリティが都市計画・都市デザインの大きなテーマになっています。そうした問題意識の中で，子どもが自分の住んでいる地域を好きになり，そこに自分が働きかけて育ったかどうかという経験が，その地域に子どもが残ろうとするきっかけになるのではないかという議論がなされています。

私は仙台の台原で育ちましたが，当時は旭丘の郊外住宅地を造成し始めている頃で，今の台原の森林公園の山でキャンプをやったり基地を造ったり，あるいはキノコやタニシを採って食べたりして遊んでいました。しかし今の子供達はそういったことは，やってはいけないと大人から制止されてしまう。

子供の遊び場作りのきっかけ

東京の世田谷に住み，自分がそこで子育てをするようになると，あまりにも自分が育った環境と違い，子供達が自由に遊べる状況に無いことに気づきました。丁度，イギリスのハートウッド卿夫人が書いた本を見つけ，海外では子どもが遊ぶという事に対して，社会が一生懸命取り組んでいるということを知り，近所の人達と一緒に「冒険遊び場」をつくり始めました。昔ぼくらが子どものときに田舎でやったように，子ども達がなんでもできるという状況を，ある一定の空間を作って保証する。子どもたちが好きな事をやってもかまわないところをつくろうとしたのです。

そういう事を始めて判ったのは，都市近郊の農村部では，子どもを遊ばせるために一生懸命田んぼを潰して，遊具を置き，公園を作るようなことが行われてきたからでした。世田谷に住んでいるものから見ると羨ましいような雑木林がいっぱいあるのに，子どもたちは雑木林に遊びに行きません。それは，大人達が生活空間として日常的に使っていないところに子どもは出入りしない，ということを示しているのではないでしょうか。つまり，今回のワークショップでも言われたように，大人が見捨てるところは子どもがなかなか入りにくい。例えば，我々がいたころ，台原の山は，当時まだ石油暖房が行き届いているわけでは無かったので，燃料をとりに近づくために人の手が入ります。大人が入っていくことで，子ども達が山に行くことについても，社会が許容している。だんだん，大人が森に入る必要性がなくなると，そこから子どもは追い出されていく。我々から見ると，羨ましいような大自然の田舎の中でも子ども達があまり遊べていない，という状況が生じています。

羽根木プレイパークの会の発足

そのような状況の中で，何とか子ども達が元気に遊ぶように挑戦してみようという事で，1975年に，近所の人と一緒に「遊ぼう会」という名前の会を作り，遊び場をボランティアで運営するようになりました。会員の持ち出しから始め，バザーや募金活動による資金で活動をしていましたが，徐々に活動が認められ，世田谷区の1979年国際児童年記念事業として，区にある公園を使った官民協働の子どもの遊び場が実現いたしました。場所と基本的な資金を世田谷区が提供し，運営は住民がやるという，「羽根木プレイパークの会」が出来あがり，現在も活動を続けています。私が最初の 5 年間会長を務め，その後は実際に子どもがいる人達にバトンタッチされて，今は四代目か五代目の会長になっています。

子供の遊びの管理

こうして世田谷区の羽根木プレイパークは私たち区民の提案で活動を始めたのです。

公園には非常に大きな枝振りの良い椎の木があり，その上にターザン小屋を建てたり，モンキーブリッジの起点になったり，あるいは滑車で滑り降りる遊びの中心になったりしています。椎の木は先のほうにいくと危ないそうですが，幹の大きいところで登るのは大丈夫で，ザラザ

ラしている椎の木の表面が子ども達が登りすぎてだんだんツルツルしてくる。そうすると「この木がかわいそうだ」という声が出て，三年くらい木登りしてはいけない，ということになったりします。当初この公園で遊び場を運営するという時に，公園側と住民でいろんな議論をしましたが，公園側は，他の公園では木に登ってはいけないと言っているのだから，ここでも登ってはいけないというのが基本的な姿勢でした。我々は登っても木が傷まないのであれば，別に登っても良いことにしようという意見でした。もし子どもが事故にあったらば，主催者達である我々は責任を負うのか負わないのかとかいう，いろんな議論を交わしました。

たとえば，モンキーブリッジ（木と木の間をロープで伝ってわたるブリッジ）は，当初三本のロープの間に落下防止のロープがついていましたが，だんだん上達してくると，もっと高く，というような希望がおきて，小さい子ども用の簡単なモンキーブリッジから，高く，できるだけ難しいものに変化します。このように，子どもの遊びに対するニーズというのは常に変わっていくものです。常に向上心があり，新しい面白い事にどんどん飛びついて行く。そういうものを地域社会がどれだけ保証できるかということが問題です。もっと高いものをやろうとすると，危ないという地域の声が出てくる。その中で，地域の声をどうまとめるかというのが，運営する側の非常に大きなテーマとなっています。

モンキーブリッジ

火起こし

地域社会，他の世代との交流

おじさん達が子供たちと一緒に竹とんぼづくりなどをするうち，「おっさんず」というグループができ，上は80から，若い30歳くらいのお父さんまで参加しています。今年は銀座の画廊で「竹とんぼ展」を開き，そうとうマニアックな竹とんぼを展示したり，インターネットで展覧会の様子を見たりすることができるようなところまで発展しています。

公園の中では火を焚くことができます。最初は火を焚けなかったのですが，民間だけで空地でやっていたときは実現していたので，公園も火を焚けるように消防署に交渉して，少しずつイベントのときはできるようになり，今ではいつでも焚たけるようになりました。ロープを使

った遊具にしても，始めはロープを付けておく事が公園側から許可されず，毎朝遊びが始まる前に行って，一時間半くらいかけてロープを一通り結び，夕方五時ころ子どもの遊びが終わる時間にまたそのロープをはずす，ということを毎日やっていたのです。そのうちにこれは危険がないという事から，そのまま付けておけるようになりました。そんな形で少しずつ行政と交渉を進めていったのですが，火だけは絶対やってはいけないという話でした。

あるとき社会教育課の人から，「キャンプに子どもをつれていってもなかなか飯盒炊さんに時間がかかって，本来はもっといろいろ楽しいことをやりたいのにできない。それで，楽しいことがもっとできるように，普段からもう少し火をコントロールできるように，ここで飯盒炊さんの訓練をできないか」という話がありました。我々は，しめたということで，社会教育課の人と児童福祉課の人達も加わってもらい，一週間程度のイベントとして，世田谷区内の小学生達がお米を持ってきて，飯盒炊さんの訓練をすることを始めました。それが次は，遊ぼう会のメンバーを集めてバイキングのやっていたパンを焼いたりして，遊びが生活の一部に入り込むようになりました。

老人の日には老人クラブの方達により，昔こんなふうにして遊んでたんだということをやって見せる，昔の子供遊びの伝承の出前がありました。この日は彼らは何かしてもらう側なのですが，お年寄り達からの発案により始まったこのイベントは毎年恒例となっています。

遊び場を運営するには資金が必要ですが，民間だけでやる場合余裕が無いので，いろいろな材料を地域の方々から協力してもらうこともあります。例えば近所で家を新築するために，取り壊される家があったら，廃材を捨てる前に使えそうな材料をもらっておき，安全のために釘などを抜いて子供達が自由に使えるようにストックしておく。それを使って子供達が小屋を造ったりしました。いろんな小屋，自分達の小屋を作り，その中では二階にはデッキがあってうさぎを飼っていたり，ちょっとエッチな漫画本を置いてあったり，一階にはお茶が飲める場所があったり，自分達の基地を都市の中で作っていくことが可能になったのです。

廃材のストック

自分達の小屋

羽根木プレイパークの会の運営

このような活動は行政が間に入ると，どうしても管理，責任という問題が出てきて，なかなか難しい。プレイパークの会では「自分の責任で自由に遊ぶ」というテーマで，地域の人達が子ども達を支える仕組みがベースになっています。それを可能にするためにボランティアを中心にして，“ プレイリーダー ” という子ども達に遊びを起こさせる人達（＝ファシリテーター）の活躍が大きい。月一回程度会議を行い運営方針を話し合ったり勉強会を行ったりしています。区の補助を受ける前は，運営に必要な年間百万円単位のお金は，プレイパークの会による廃品回収やバザーなどにより賄いました。

日常的には子どもたちも好き勝手なことをして遊んでいますが，年間に何回か地域の大人も入ってくるようなイベントを開催したりして，地域の人が手をかけ，遊ぶ環境を整えることによって子どもが遊ぶようにします。学ぶことと遊ぶことは，子供の成長にとってとても大きな要因で，学校で教えられること以外に自らみつけて何かをやっていくという体験は，人間が生きていく上で非常に力になるのではないかと思います。学校で多少成績が悪くても，いろんな事を経験していた方が後々大人になって元気だという現実を見ても理解できます。そうした人間が少なくなっているというのが今の状況で，次の時代の日本を支える元気な人をどうやって育てるかというのが大きな課題であり，それに果たす地域の役割もたいへん大きいのではないでしょうか。

「自分の責任で自由に遊ぶ」

ファシリテーターの会合

* 高齢者と地域の交流：塩入健史（株式会社　東北設計計画研究所）

泉パークタウンに住む私と家族

私は家もアトリエも泉パークタウンの中にあり，400m の職住近接者です。クルマ通勤ですが，サスティナビリティという視点から言うと徒歩通勤に改めるべきなのでしょう。

私の仕事は高齢者関係の設計が多く，私の家族も高齢者世帯です。1970年，父の代に将監団地に住み始め，88年に泉パークタウンに移っています。将監団地は70年に開発が始まり，

80年には人口2.1万人になりましたが，現在は1.6万人に減少しています。そういう形で団地の成熟の仕方が顕著に出ています。

1988年，家族六人，将監から泉パークタウンに移り，将監団地とパークタウンにほぼ15年づつ住んでいることになります。私は将監団地にいるとき30代，パークタウンでは50代，つまり私達の子育ての時代15年は，ほとんど将監団地で過ごしている。そうなると，私の交遊範囲，地域との交わりは，将監団地では子供を介して広がりましたが，パークタウンではゴミ出しと多少のご近所づきあい程度から広がりません。60になった今，「高齢者と地域の交わり」は私自身のテーマでもあります。

泉パークタウンとは

泉パークタウンは以下のような特徴があります。

（1）恵まれたベッドタウン（郊外団地）

・整った街路計画，高い緑地率，ゴルフ場のまち

・県立図書館，宮城大の町

・建築協定のまち

・長距離通勤・マイカーのまち

このように，どちらかというと若いファミリー向けに作られた町を，年をとってからどう使いこなすかが課題です。

（2）移住一世の町

もう一つのパークタウンの特徴は，住みながら開発し続けている町ということです。最初の段階で，高森一丁目から五丁目，次に寺岡，そして高森の 5 丁目以降，それから桂，紫山と続いています。地域の成熟のためには様々な面において時間が必要ですが，その点でのギャップというものが他の町とはちょっと違う形であらわれてきています。

（3）仙台の住宅事情から

開発当時デベロッパーは売りやすくするためにどのようなことを考えたかというと，高いステイタスや緑被率の高さといった事の他に，住民の年代構成を混在させるという事があったようです。つまり，30年前に30代で最初に移り住んだ人が子育てを終わり，開発が終わりつつある桂の方では子育て真っ最中の方や子育てがこれからという人達，それと私達のようによそで子育てをしてからこの町に入ってきたタイプ，要するに学校という地域との関わりの機会がすくない中で，どういうふうにしてこれから先の生活で交わりを考えていくのかという人達。こういう多世代の問題が混在しているのがこの町の特徴です。2.1万人から1.6万人まで人口が減少した将監団地等，市内の他の団地と比較して考えたい特徴です。

公的施設に期待する新たな交わり

そのような世代がどう充実して交わっていくか，私はそういう場として公共施設，学校や病

院，福祉施設であるとか，また公共施設以外の商業施設であるとか（寺岡の子ども達が親しむ“せき文”などもそこに入る），そういう施設が，一つの私達の交わりの場になると期待したい。

① 地域に開かれた大学
- ・知的欲求への対応（公開講座・教育ボランティア育成など）

② 地域と支えあう小・中学校
- ・地域の教育力の再生
- ・多様な学習の支援，郊外での教育・見守りの役割
- ・男女共同参画社会における子供の生活支援の役割
- ・地域の学習・生活センター機能など

③ 地域に開かれた福祉・医療
- ・通所デイ・ナイトサービス機能
  （ホームヘルパー・デイサービス・ショートステイ）
- ・継続居住を支える様々なサポートの拠点

事例：高齢者福祉施設

老人保険福祉サービスの体系

高齢者福祉のサービス体系では「在宅介護」とは，自宅にいながら介護が必要な高齢者ですが，この他に介護を必要としないもっと多くの高齢者層があります。数でいうと，仙台の人口が約100万で，65才以上が11%弱と言われていますから，約11万人の65才以上がいます。老人ホーム等のベッド数は，仙台市にほぼ5,000床，宮城県全体で10,000床と言われています。このように高齢者11万人のうち，福祉施設のベットが5,000で，後は通所サービスですから，相当の方が地域で年を重ねることになります。私達ほとんどの場合，自宅で臨終を迎えるということにならないので，現在元気な方々も相当の人々がこれらの施設と利用関係をもつというふうに考えられます。

事例 1 ：エバーグリーン（松田会）

身近な施設として，パークタウンの入口にあります松田会の施設群をご紹介します。一番最初に25床の病院がスタートし，次にリハビリテーション，老人保健施設，100床の病院，それからエバーグリーン病院という新しい痴呆の施設ができました。これら施設群はここ20年ほどの間に，医療の結果そして福祉の結果，総合的な施設内容を整えてきました。病院のたいへんな数のベッドをみて，この中のベッドの一つに僕らが入るかと思うと，圧倒されるところがあります。確かにそういう施設としての悲しさというものはあるわけですが，年々進歩改善が行われています。8 年前に作った病棟では，50人を一つの看護単位とし，同じベッドが，個室，4 人部屋などに振り分けられていましたが，この時代，個室の数というのはある制度的な規制を受けていました。それを現在は Fig5 のような形で50人を十数人ずつのグループに

分けながら，今の「グループホーム」という形にどんどん展開していったわけです。Fig6 はそのなかの一つで，畳があり，その上にソファーを置き，脇に机と棚があるのですが，ここでスタッフはいつもナースステーションとかサービスステーションとかそういう中からこういう所にパソコンを持って出る形です。僕らが図面を書いて作ったものを使いこなす。自分達の茶の間のように使っています。これは大変優れたやりかたで，一度補助金をもらってつくったものはなかなか直さないのが普通なのですが，こういう形は全国でもめずらしいので見学者も多いようです。結果として先ほどのような様々な実践をしながら，新しいものを見ていく形，これが身近な所にあります。

これをご紹介したのは，この町で僕らが歳を重ねるという時に，こういう施設があり，その関わりを持たなければならないということを理解した上で，毎日の生活を考える必要があると思うからです。

Fig5

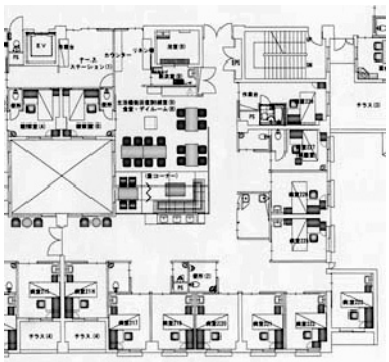


Fig6

事例 2 ：山元町立山下中学校

もう一つの例は，山本町立山下中学校です。この学校の目標の一つは，地域と学校が支え合うということと，もう一つは IT 化，パソコンを学習の中でどういうふうに使うかということです。つまり今回のテーマとして申し上げたいのは，本気で地域に学校を利用してもらうと，地域ぐるみで，学校の先生だけではできない生徒達の学習，授業を行うことができる。また一方で地域の方達は，地域開放を受け，学校に参加することで，地域の中での自分達の役割を作ります。つまりパークタウンの中で，もし僕らが歳をとっていく時に，このように学校を開放的に使うことができるとすれば，多世代の，例えば，これから子育てをする若い世帯や，僕達のような子育てを終えてからこの町へ引っ越してくる世帯が，学校を核にしながら一つの交わりの関係を作っていけるのではないでしょうか。

＊点描・いずみの郊外団地：岩澤克輔氏（仙台市泉区役所まちづくり推進課）

まちづくり推進課というのが出来たのが去年の春で，約 1 年半ですが，まちづくり推進課って一体何をしているのかと言われますと，まず 1 つ，安全・安心のまちづくりみたいなことで，防犯とか交通安全，防災といったようなもの，それから地域活動，コミュニティ，町内会等の支援，市民センターの支援運営，コミュニティー・センターの建設，等々いろんな事をやっています。いろんなまちづくりを区民の皆さんと一緒にやろうという事で，例えばいろんな文化的なスポーツ等のイベントを行うという事もあります。それから広聴相談指導の機会に，皆さんのお小言を頂戴するという仕事もあり，その解決に向けて協力するという役割も負っています。そんな仕事の関係で，毎日泉区内を団地から団地へ走りまわっております。今日は，泉区内を歩き回っている私の目から見た郊外住宅地の様子を写真で紹介したいと思います。

仙台駅を中心にして10km 圏の西側，住吉台，泉ビレッジから始めます。

住吉台：リゾート感覚のログハウス館

館・泉ビレッジ：整備された緑道・並木道

暖炉の記号としての煙突

郊外住宅の必須アイテム　ウッドデッキと芝生

ガーデニング，手入れの行き届いた花と緑

ペット（特に犬）飼い主同士のコミュニケーション

小物で飾られたきれいな玄関周り

住宅地のカルチャー教室，喫茶店，塾

町内会活動，研修会

個性的なクルマや，2 台目 3 台目のクルマ

ドイツ風・イギリス風街並み

西中山：草原はバブルの後遺症か

上谷刈：都心に近い場所ながらリゾート感覚

丸山地区：自分達の生活環境を守る住民運動も

黒松：一番古い団地。スター型のアパート。

旭丘，堤：古い団地だが綺麗に住んでいる

古い団地には古い団地の住まう感性，皆さんと交流をする感性がある。

南光台：アメリカンスタイルの新興住宅地

松森：動物霊園，ペット病院，ワンワンホテル

歩坂町，泉ヶ丘：すべてがアパートの街！

向陽台：鉄塔の下の公共施設

多摩ニュータウンなども鉄塔の下に公共施設の土地を確保している。

山ノ寺：生協が閉店：非常にお年寄りが多い地域。

しばらくの間は無料送迎バスを黒松生協に。

大沢：団地の造成が大雨で崩れることも。

野村：今でも昔の佇まいをみせる旧家
古い民家，農地と新しい住宅地の混在

泉中央：休耕田に生息するキジ（写真中央）

＊討議

千葉：これから討議に移らせて頂きたいと思います。大村先生と塩入先生のお話がそれぞれこれから成熟していく郊外住宅地のあるべき姿，そして泉パークタウンの現状や高齢者施設はこういう状態になっているという，そういうお話だったと思うんですが，岩澤さんのお話は，郊外住宅地一般の実情ではなかったかと思います。たくさんの豪邸の写真が出てまいりまして様々な郊外住宅地の特徴的メッセージを捉えているように感じました。購入される壮年期の人々の理想の住宅といえるようものがそこに作りだされているという感じがしました。ですからそこでは子どもの姿とかお年寄りの姿が見え難い。そのような郊外住宅地が次々と新しく開発されていくとすると，岩澤さんの最後の方のスライドのように古い団地が打ち捨てられるような状態が広がっていくような危機感も感じました。

今回，「交流する地域づくり」というテーマで，公開講座を考えた時に，小学生には小学生の，中学生には中学生の，壮年期の方には壮年期の方の，男性，女性，それぞれに交流の場所が，お年寄りにもそういった交流の場所があるのではないかと考えていました。それで三人の先生方のお話を聞きながら，各世代の交流の場がどういうふうに互いに結びつけられるか。世代間交流はどのように成立するのかということが一つ課題としてあると感じました。それぞれの世代ごとの交流の場は充分か，不充分かも同様に課題として考えられます。

それともう一つは，交流が自然に行われるには，人と人が直接出会って話をするということよりも，公園という場所であったり，高齢者施設というような施設，あるいは住宅，あるいは店というような，施設であるとか，ペットや，ガーデニングであれば庭といった，

「もの」や場所を介在させて成り立つのかな，と感じました。

そこでまず，岩澤さんがお話の中で，もう少し説明したいと言われていましたので，「交流」にふれながらお話いただけたらと思います。

岩澤：先程の写真は，見せっぱなしではまずいと思いますので，多少の解説を加えたいと思います。並べた写真を整理をしてみますと，郊外団地の必須アイテムは何なのかということになるんです。繰り返しになりますが，一つは緑と花。それから犬や猫とかのペット。外出するための車。もしかしたらパステルカラーの色使いもそうかもしれない。それからスポーツや健康維持のようなことも郊外住宅地の必須アイテム。必須アイテムというよりは人気アイテムといったらいいでしょうか。例えば緑や花の装置として，ウッドデッキの話をしました。それから非常にオープンな庭。昔ですと，私は大阪で育ったのですが，大阪とか京都というと，ほとんど塀をまわして中が一切見えない家ばかりです。それからすると，中をみせている庭というのは，信じられない世界です。家と外界とを繋ぐ装置としてみることができます。その中が植栽と芝生とウッドデッキという段階性をもっています。だんだん家の中から外へ向かうそういう段階性を持っている。そういう所に緑とかガーデニングがあります。そこに，やはり，外と繋がりあっている人達の姿というのが私には見えてきます。もちろん緑が好き花が好きというのもあると思うんですが，それだけではないっていうような気がします。それから犬のようなペットもそうですね。ペット同士を連れ合って，犬の散歩をしている人同士が毎日同じ時間に同じ場所で会うわけです。そこで交流が進んでいく。コミュニティ・センターを交流の場として下手に作るよりもよっぽど路上交流のほうが盛んなのではないかと私は思います。2 台目，3 台目の車も，外に出かけて行っての交流です。そのツールです。それからスポーツとか健康維持のために行うジョギングとかテニスとか，いろんな健康のための施設があったり，通われたりするんですが，そういう場でのコミュニティや，繋がり合いというのがあるわけです。こういった郊外住宅団地の必須アイテムというのは，全て私にはコミュニティ・ツールとして働いている面があるだろうと見えてくるんです。私達行政は，住民同士の交流というのを，お祭りをすることだとか，町内会をしっかりすることだとかと言うわけなんですが，実は，見えないところにある自然な交流といいますか，何気ない日常的なそういった交流が，現在の郊外団地にはいっぱい出来ていて，かつて私が少年時代を過ごした団地とは，全然違う。私が十代の頃に育った団地では，そういうアイテムが一切ありませんでした。楽しい行事もありませんし，逆にあったのは，先ほど大村先生のお話にもあったような事です。旭ヶ丘に私は少年時代に住んでいて，この団地では，とにかく道普請や草刈り，そういったものを本当に皆でやったんです。本当にその地域にとって必要なことを皆でやるのがコミュニケーションだったんです。時代が大きく様変わりしまして，そうしたことは税金で役所

にやってもらうとか，パークタウンだったらパークタウンサービスにやってもらうとか，お金に切り替わって，サービスに変わりました。時代が変わってコミュニケーションのとり方も変わった。そんな事を考えながらの先ほどの写真であったということを伝えたいと思います。

千葉：交流のありようが変わったというお話だったんですが，その点に関して，ご意見がある先生はいらっしゃいますか。

岩澤さんが今言われた現在の郊外住宅地の交流というのは，私には，壮年期の元気な人の，自分達同士の交流という感じがしました。そこでは子どもの交流とか，お年寄りの交流とかが，どうイメージされるのかが気になるんですが，どうでしょうか。

岩澤：先ほどは私流の交流の解釈を言ったんですが，やはり，いろんな交流があるわけなんで，子どもの交流であるとか，お年寄りの交流というのがあると思います。それをになう一番包括的な団体として，町内会があると思うんです。ですが，「役所からの頼まれごとだけで手一杯」とか，「役員になる人はいないし，とにかく時間ばかりとられてひどいもんだ」という小言を私たちは随分頂くんですが，町内会の可能性のようなことについて，私も最近考えるんです。町内会は，包括的な支援団体として唯一のものなんです。あらゆる年代のあらゆる層から存在する組織で，一部の方のものではないんです。その機能というのは，役所のお願いを住民に伝えるような役割をするんだろうと思うんですが，それで手一杯になって，本当の意味での町内会の役割をなかなか果たせないという気がします。一方で，地元の方からの町内会に関する批判というのもあります。「年寄りばっかでやってる」とか，いろんな陰口を言われたりする部分もあるんですが，本当はいろんな事ができるはずだと思うんです。

例えば，私は最近，先ほど写真で紹介した，館泉ビレッジの町内会に注目をしています。研修会の時に招かれて話を伺ったんですが，一つ驚いたのは，町内会長さんが，「子どもを町内会活動に小さいうちから馴染ませるような仕掛けが，なんか出来ないものだろうか」とおっしゃっていたんです。明解な答えはできませんでしたが，素晴らしい考えだと思いました。子供たちを変えるのとは違うんです。町内会活動そのものを小さいうちから自然な形でなじませる，ということをお考えになっている。そして，先ほど地域のアイデンティティという話しがありましたが，スライドでも触れたように，皆でこの地区の歌として歌える歌を歌っちゃうんです。とにかく研修会をやってる町内会というのもめずらしい。それから最近コミュニティ・センターで，インターネットを始められたんです。まだ始めて数ヶ月ですが，内容をみてると意外に面白い，地域のいろんな情報をちゃんと皆に伝える。インターネットを使える方がどれだけいるかという問題もあるんですが，この時期に始めたというのは賞賛に値すると思います。情報収集する，発信するということをずっと

仕事の一つとして捉えていくと，町内会が変わっていくと感じます。福祉の問題や子どもの問題のお話もありましたが，そういう事を包括的に皆で扱いあっていけるような形ができるのではないかと感じました。

最近テレビで，幕張ニュータウンという大きな千葉の団地で，やはりインターネットで今までの町内会のタイプとは全然違う，ネットで繋がり合う地域社会が出来ているというような番組もありましたが，どうゆう方向だったら成功するということではなく，それぞれの地域に合わせた交流のありかたがあるのではないか，考えていくべきなのではないかと思います。私もそのお手伝いをしていきたいと思います。

千葉：町づくりの主体の話が出たと思うんです。先ほど大村先生から「冒険遊び場」のお話をして頂いた際に，役所の規制だとか町内会の対応についてのお話がありまして，今，岩澤さんから町内会の活動も多様なやりかたが考えられるのではないかというような，町づくりの組織のあり方のような話もでました。大村先生は，先ほど話に出た幕張ニュータウンに関わってこられたという経緯がございますし，郊外住宅地の地域づくりを担う主体として，どんな人や組織が考えられるかということをお話頂ければと思います。

大村：もう三十年以上前に，先ほど述べたようなことを世田谷区の羽根木でやり始めたときの経緯ですが，我々は世田谷に住んでいて，町内の仕事は何にもしないけど，町会費はなんとか納めるという程度で，「子どもが思い切り遊ぶような場がない状況では問題があると思うが」という事で，PTA の中の有志と言ったらいいかと思うんですが，「そうだそうだ」と思う人が集まって事を始めた。その時に，東京・世田谷区といっても，やはりその地域が従来から持っている社会の枠組みはしっかりあると思いました。空地を探すために，あちこちへ話しかけるわけですが，そうすると，地主さん，元地主さんのネットワークがしっかりあるのに気付きました。遠く離れたところに住んでいる地主さんたちが，「なんか変な連中がやってきて土地を一年間貸してくれって言ってきたけど，おまえの所にも行くぞ」なんていう情報がちゃんと伝わっているんです。それを一番下の基礎にして，その上に商店会のアクティブな活動をする人達の動きがあって，それが地域の大きな枠組みを作っている。そういう枠組みから生まれてきている町内会長さんが柔らかいか固いかで，その地域の動きは，若い連中の好きなことを許容できるか，あるいはなかなかそういうことをさせないかに分かれる。私の場合は，夜中に電話がかかって来て，「お前らはどこの宗教だ」と，「なんか新興宗教であんなことをやってるんじゃないか」と勘ぐる人が町会の役員にいたり，「お前はどこの党員か」と，「どっかの党内活動として区会議員の選挙かなんかに出るためにやってるんじゃないか」と勘ぐる人達が出てくる。そういう事ではなく，僕達は純粋に自分の息子や娘がもう少し面白い暮らしをして育つことが大切じゃないか，という思いで動いているわけですが，変に疑われて，最初は相当いじめられまし

た。「格好いいことをやっているけれども，我々はもっと苦しい仕事を町内会としてやっているんだ」と。活動が何年間か継続すると，共感してくれる人も増え，私は今でも世田谷に帰ると市民権を得ていて，たまに帰ると「飲みに行こう」なんて近所の商店街のおやじさん達に誘われる。そういう地元の人との関係がいつか出来てきました。そうなる迄はそうとう時間はかかるわけです。

今，社会がどんどん市民型社会になりかけていますが，過渡期で，地域に参加するのは煩わしいと思っている人達がいっぱいいます。その理由のひとつとして，自分達が発言しても，自分達の思っている事が出来ないという事がありますが，この遠ざかっていっている人達をもっと生き生き参加させる仕掛けというのが，とても大切になってきているのではないかと思います。何かやってみようと思う人の思いがその通りになったり，あるいは，それぞれの人が社会の中で輝いて見えるような活動を地域が支援できることが，地域を作っていく上で，大切かなと，僕は思うんですね。岩澤さんの先ほどの話とからめて言うと，地域に四六時中はりついてしまわざるをえない，車で自分で好きなところに行けない子どもだとか，お年寄りの人だとか，あるいは子育てのために地域に残ってしまう奥さん方とか，そういう方々にとって本当に住みやすい地域をそういう方々の声を聞きながら皆で作るというのは一体どういうことなのかという取り組みは，これから本格的になるのかなと，私は思います。

岩澤：本当は今日話す予定だった，コミュニティ・センターというのは，そういう活動を盛んにするために作るもので，実は仙台市は昭和50年から，市内にもう既に65館，小学校区に１つずつ，ほぼ全域に作ったんですが，これに関わる「地域をこうしたい，ああしたい」という人がいるかいないかで，そこの活動がどんなに違うかというのを感じます。コミュニティ・センターの最大の特徴は，地元住民が運営をすることなんです。ですから，ここ数年のことですが，最近は，作る時から「どんなものが必要か」という議論を重ねて，地元住民の方に作る時の責任を負って頂く。設計会社と地元の方々と行政の担当者で，全てのことを二年近く話し合いを続けて，これから建設が始まるものもあります。結局，自分達が作ったものを自分達で運営して，自分達で使いあって，その評価も自分達でし，改修の段階も自分達でしていく。行政の身勝手な言い分のように聞こえるかもしれませんが，そうではなくて，まさにそれが住民の自治を育てていく，そういう拠点性をもっているのではないかという気がします。

コミュニティ・センターを作るというと，とにかく明日から人をかき集めて貸し出せばよいという地元の方がいるんです。それも確かに大事なんですが，本当に大事なのは，そこを使って何をして行きたいのか，それがコミュニティ・センターの存在理由です。「その運営団体はコミュニティ推進協議会というところで，市の受託団体ですが，…」こうい

う話をさせて頂きますと，「その協議会をどうやって作るんですか」，「どう運営すればいいですか」，「何をすればいいんですか」と，矢継ぎ早に聞かれるんです。「それは皆さんがお考えになるんですよ」って言うと，「何だ」といわれるんですが，やはり自分達で自分達の空間を創造していく，自分達のアクションを考えていくことが，まちを生き生きさせる。先ほどの話にもありましたが，「お年寄り，子ども，家にこもりがちの専業主婦の方，障害者の方，すべての方を飲みこんで，地域が生き生きと光輝くには，コミュニティセンターをどう作って，どう生かすかが大事で，これは千載一遇の皆さんのチャンスですよ」と申し上げて討論して頂くんです。そんなことを付け加えさせて頂きます。

千葉：大村先生のお話で，古くからの地域では，地域のもっている枠組みがしっかりしている。それに対し，郊外住宅地というのはできてからまだ日が浅くて，そうした枠組は，町内会であったり，あるいは商店会だったりします。他のしがらみがないだけに，商店会なり町内会を運営される方の柔軟性や，住民と組織との関係が，これから郊外住宅地が成熟して行くかどうかの重要な要素になると思いますが，その点も含めて，主婦の立場から，今回ファシリテーターをやって頂いた，芦立さんに，ご自身が住んでいる町と，郊外住宅地の違いでも構いませんし，お話を頂ければと思います。

芦立：私は，昨日の中学三年生の子達と同じ中三の娘がいる主婦ですが，実は岩澤さんが先ほど紹介された南光台団地で育ちました。あれを見たときに，「ここ南光台と違う」と思ったんです。私が住んでいた時には，鶴ヶ谷団地が造成されていました。よく日曜日に父親と一緒に南光台六丁目までバスで行って，そこから歩くんですが，毎週行くとそのたびに山が崩されて，ブルドーザーで造成されているのを見て，どんどん砂埃の更地が増えていく姿を見るのがとても楽しみで，自分の住んでいる場所，生きている場所はそういうものなんだとずっと思っていました。先ほど，大村先生から「大人達が生活空間として使わない所には子どもも入らない」，それから「子ども達が育つときに自分が地域に働きかけたかどうかが，将来地域に残るかどうかに影響する」というようなお話があったんですが，すごくなるほどと思いました。実は南光台も，道普請はなかったんですが，よくドブさらいを毎月，第何週の日曜日の朝六時からというのがあって，その時は私どもの親も出ざるをえない，子どもも，子ども会ででるようにとお達しがあって，皆でそれぞれ家からホースでザーっと流して掃除したりしていたんです。ですから私は，結構自分の住んだ団地には愛着があります。やはり，自分が綺麗にしてきた町なんだという思い入れもあるんです。

今，嫁いでいる場所は，郊外の郊外の農村集落でして，こちらには舅，姑もおります。恒例の掃除もあるんですが，まだお祖父さん達がやっています。そうすると若い私達みたいな世代は自分達の土地という愛着が実は今まだない。祖父さん祖母さんの土地なんだという感じがします。先ほどの大村先生の話しを聞いたときに，うちにも裏山があるんです

が，私達は入りませんから，子どもたちはどうなんだろうと考えましたが，子どもも入りません。昨日のワークショップでは，虫が大嫌いな子ども達が，散策路の入口が草ボウボウだったんですが，中が綺麗に整理されていて歩けるコースになっていたからだと思いますが，寺岡の山に入って行って，何処見たって同じ所にしか見えないのに，「こっちこっち」と教えてくれるんです。「何んでここ行けるの知ってるの？」と聞くと，「小学校の時に小学校の裏山だったので，先生と一緒に来て，秘密基地を俺達が作ったんだ」と言うんです。なじみがあれば子ども達は秘密基地なんかも作れるんだと思いましたが，逆に，自分が親だったら，入らないで欲しいと思う反面，でもやはり，子ども達というのは，そういう危険な所，親の目も届かない所も好きなんだけれども，きっかけとして小学校かなにかで行ったことが無ければ入らないんだろうと思っておりました。

郊外住宅地とか，団地にも，子ども達が隠れて遊べる場所とか，親の目を離れながらも遊べる，そういう場所があったりするので，大人が見ないふりをしながら，いかに子ども達を遊ばせてあげるかが必要なのかなということを昨日，町歩きをしながら考えました。

千葉：続いて船木さん，同じ質問ですがお願いします。

船木：岩澤さんが，「時代によって交流の有り様が変わって来た」と話されていましたが，私もそう感じています。大村先生もおっしゃったんですが，地域に関わるのをわずらわしいと感じる人が増えている。それは身体を動かしたくない人が増えているからだと思うんです。自分の髪の毛とか顔は気にするけれど，隣の人のことは気にならない，町のことも，もしかしたら気にならないというようなことが起こっていると感じます。昨日，子ども達に「この場所はどうしたらもっと楽しくなるかな」という視点を持ってもらいたいと思いながらワークショップをしたのですが，やはり子どもだからと思いますが，草刈りしてほしいとか，「してほしい」という要望が多くありました。そこを自分でしてみたいと思うようにするにはやはり，大人が最初にきっかけ作りをするのがとても大事だと思います。子どもの遊びは子どもの間だけで作られるとよく言われますが，本当はそうではなくて，昔から大人がいい出会いを作って，子ども達がそれを吸収して遊びや文化が繋がってきたと思います。ですから町でも，大人が本気でそういう出会いを作らないと，子どもに繋がって行かないし，子ども達が町に残るかどうかにも関わってくると思います。昨日のワークションプの次の展開として，もし出来るなら，谷間公園と，桂島緑地の遊水池の草刈りを，お母さんやお父さんが子ども達と一緒にやって，その日刈り終わったあとに，あそこで何か美味しいものを食べるというような事をやってみるのはどうだろうと思います。せっかく宮城大学がこういう事を仕掛けたので，やはり宮城大学としても具体的に身体で動くのがいいのではないか。私も手伝いますので，本当に動く事で，大学と地域の交流もできるし，地域同士の交流も出来るのではないかと私は思っています。

千葉：それでは塩入先生に，施設を作られている立場から見て，高齢者の方がどういう所で交流されるのがいいかというあたりについてお話を頂きたいと思います。

塩入：施設の関係で高齢者のことだけを話してもそんなに違和感はないのですが，高齢者とくくって，高齢者の交流というのは，どうもおかしいと思っています。高齢者同士の交流だけを高齢者の交流というふうになかなか言い切れない。難しい部分があります。福祉の施設の中でも様々なスタッフとの関係もあります。確かに中には威張り散らしているお年寄りもいますし，いろんな形で僕らもいいお年寄りになってないと，結構あとで寂しい目をみるだろうということもあります。けれども，社会が老人について考えだしたのは，歴史を見るとつい最近です。僕が一番最初に作った老人ホームが茂庭台の老人ホームで，これが出来たのが昭和の最後，今から13年前くらいなんですが，地元住民の署名反対運動がありまして，地元の新聞も反対を支持しました。老人ホームは団地住民には迷惑施設と考えられ，建設を認める代わりに19床の診療所を併設することになりました。その診療所は三年間くらい一度も入院する人がいないままに老人ホームへ転換されました。

老人達が社会的に施設に居住するということについてのコンセンサスが得られて，せいぜい13〜15年しか歴史がない。自立して生活することよりも，世話してあげることだけを重視する僕らの意識の問題が大きいと思います。私の親も80代後半で，最近は，ショートステイのようなかたちでサポートをうけていますが，つい先ごろ迄は，遠くの身内等にサポートを求めていました。僕は自分でもそういう施設を作りながら，そういう形で解決していたわけです。私が言いたいのは，お年寄りの交流という前に，僕らの意識の中の自立ということと，お世話をするということについて考えていきたいということです。そういうものを地域で作り上げるために，先ほども触れましたが，一部の学校で行われている地域への開放の形，その中へお年寄りが入って，地域社会で失われてしまった高齢者の地域社会における役割を再生できないと，交流する関係が生まれないと思います。

ですから僕はお年寄りの問題に期待できるのは学校ではないかと思います。それと自分のこととして福祉の施設に関心を持って接する必要があると思っています。

千葉：では最後に，大村先生にお話頂いて終わりにしたいと思います。

大村：お年寄りのことについて少し言いたいと思うんですが，お年寄りの交流のことを話すときに，もうケアをしなくてはいけなくなったお年寄りのことだけを考えていてはいけないと思います。私は仙台に帰ってきまして，今，親と一緒にいます。去年親父が死んで，今88になったお袋と住んでいますが，なるべくお袋がやれることは，それに甘えている部分もありますが，全部やってもらう。親父は自分の家で，例えばご近所の人達を集めて読書会なんかをやっていた。それからお袋は保母師やなんかをやっていて，ご近所の方がきて，いろんな集まりが家の中で行われている。つまり年をとって動きにくくなると，自

分の家というのが非常に交流の場としていい場所なんです。残念ながら家の規模がそんなに大きくないから，大きな事はできないわけだけれども，年とってからの身の丈に合うくらいの家です。

さっきの大きい家を見ていると，いわゆる交流の場は，かなりあちこちで出来そうだと感じました。仙台の郊外も大丈夫なんじゃないかと思うほどたくさんある。おそらく公共空間で交流を促進しはじめた歴史はそんなに古いわけではなくて，大体昔は地域の主だった大きなお屋敷の中で例会があった。年に一回か二回酒を飲むとかそういうのがあったわけです。戦後のミニマムなサイズの住宅規模ではできなくなったのです。しかし地域の人が趣味などを通して集まってくる動きは現在活発に起きていて，その交流をバックアップする仕組みやシステムを作ると相当いろんな事がここでも動くのではないかと思いました。

幕張は，僕が11，2 年付き合っている住宅地です。百戸くらいの単位のマンションですが，一つのマンションに，それぞれデベロッパーが一つ集会室を設けていて，それで10年目くらいに，初めてコミュニティの場が作られた。そのコミュニティー・コアに対して住民のプライドがあって，日本に数台しかないピアノを，高い金出して買う募金を自分達でやるという心意気がその集団の中に生まれている。そういう町内会全体の情報を，ちゃっかり近所のホテルとか車の広告で，色刷り 8 ページくらいの町内会誌にして，無料で皆に配布するということをやっている。デザイン関係やってるお父さんとか，編集のプロ達が相当いて，そういう中で様々な地域社会が生まれているという事実があります。ここは埋立地で，土地は千葉県が持っていることもあって，地主との関係がない事もあります。そういう状況は，仙台の郊外住宅地でも作れるのかなと思います。やる気がある人がいて，バックアップする人がいれば，様々なことが出来ると思います。

千葉：歴史的なしがらみのある硬い枠組みに縛られないだけに，郊外住宅地というのは，やる気さえあればどんどん様々な交流ができるのではないかと，それぞれの交流も，世代をこえた交流をイメージしながら，お互いの交流が考えられていくといいのではないかと思いました。